

夫婦で冒険者！
奥さんは魔女。
旦那さんは寝取られマソ。

第一章 レザーパンツの尻

八ヶ岳昌司



プロローグ

遠い昔、一人の男が一人の女に恋をした。

男は善なる者であり、また女は類い稀なる美しき女であった。

だが女の美しさに魅せられたのは男だけでは無かった。

闇なる者たちもまた、女に魅せられ、その影から忍び寄った。

男は闇なる者たちと戦ったが、女を守ることは出来なかつた。

女の心は悪に染まつており、その心は善よりも悪を選んだからだ。

女は男を裏切り、その代償として魔の力を得た。

敗れた男は死を選び、女は闇なる者たちの王と交わり、その子を産んだ。

女は闇なる者たちと共に地獄へ落とされ、その行方は誰にもわからない。

(すなわちこれがすべての物語の発端となる、最初の寝取られと呼ばれる出来事である)

第一章 レザーパンツの尻

「おい、見ろよ、すげえいい女だな、あれ」

混雑したギルドの酒場で、荒くれ者の太い腕を避けて歩きながら、ヨリカは一人の男がそう言つて、片手に持ったジヨツキで、女の方を指し示すのを見た。

男が指し示した女性は自分ではない。自分の前を歩いている、一人の素敵な大人の女性。大人とは言つても、ヨリカと年齢はいくつも違わない。けれども冒険者として名を為し、最強の魔女として恐れられているこの女性は、ヨリカにとって憧れの存在だった。

その女性の名はミユリ・クラウチ。

ヨリカにとつては歳上の従姉妹にあたる。

冒険者を志すヨリカは、この従姉妹を頼つて、田舎の町から、冒険者の集まる北の地、ムーンヴィルへとやって来たのだ。

でも従姉妹といつても、どうして自分とはこんなに違うんだろう。

彼女の黒い革製の胸当てからは、豊かにふくらんだ乳房がのぞき、その中央に深い谷間が見えている。

胸当ての下には、きゅつと引き締まったウエストがあり、白い肌と、かわいらしいへそが露出している。

そしてそのさらに下には、胸当てと同様、黒い革で出来た長いレザーパンツを颯爽と履きこなし、そのレザーパンツに包まれた形の良いお尻が、彼女が歩くたびに揺れる。

スタイルの良さも、胸の大きさも、魔法の才能すらも、人並み以下の自分とは似ても似つかない。

「見ろよ、あの色っぽい尻。あんなでかいケツを、革のスポンでピチピチに包まれたら、見る方はたまらねえぜ」

さきほど声を上げた男が、ビールジョッキを掲げたまま、さらに大きな声を出す。

その下品な言葉に、周囲の何人かは睨むような視線を浴びせたが、男は気付いていない。

「だよなあ。でも残念ながら、あの女性（ひと）は人妻だぜ？」

男の向かいに座っているもう一人の別の男が、見かねたように声をかけた。

「何？ 旦那がいるのか、あの女？」

ビールジョッキの男は、狼狽したように聞き返す。向かいの男はにやりと笑って、そんなことも知らないのかといった様子で返答した。

「お前、これからこの町で冒険者をやろうつてのに、ミユリさんの事を知らないのかよ。彼女はこの町の英雄なんだぜ」

男がミユリの尻に注いでいた視線を、ミユリの左手に移すと、確かにそこには薬指に金色のリングが輝いている。

そして男は、ミユリとヨリカの後ろに、笑顔を振りまきながらひよこひよこ歩いている白い法衣（ローブ）を着た男に気が付いた。

「おい、まさか、あれが旦那だって言うんじゃないだろうな……」

彼がそう言ったのは、白いローブの男が、あまりにも貧相だったからだ。背が低く小太りで、貧相なまで肩の体形。滑稽としか言いようのないおかつぱ頭。そして顔には丸い眼鏡をかけている。魔法使いだと言われれば、確かにそれはふさわしい姿なのかもしれないが、あのセクシ

「な女の旦那だと言うには、あまりにもふさわしくない男だ。」

「お前、本当に何も知らずにこの町に来たんだな。あの人は、回復と防御魔法のスペシャリストなんだ。癒し系のタチバナさんって呼ばれて、みんなに頼られている人なんだからな」

明らかに冒険者歴が長いと思われる向かいの男は、シヨットグラスを手に持ったまま、ローブの男に会釈をしてみせた。タチバナと呼ばれたその白いローブの男は、満面の笑顔で「やあ、元氣？」と挨拶を返す。

「あれが旦那か……」

一行が通り過ぎたのを確かめてから、明らかに冒険者としては駆け出しの、ビールジョッキを持った男は、そうつぶやき、絶句した。

「じゃあ、何か？　あの見事な尻を、パンパン叩いたり、思い切り撫で回したりしていいのは、あの貧相な男ただ一人だけ、っていうことか……？」

腕力自慢らしく、筋肉の隆起した毛むくじやらの太い腕で頭を抱えながら、この町にやってきたばかりの冒険者は、納得できない様子を見せる。

「そういうことになるな」

腕力だけでは冒険は出来ないことをとうに知っている向かいの男は、冷静な態度のまま、そう答えた。

「なんてこった。世の中間違ってるぜ」

酒が回ったのか、頭をかきむしってテーブルに突っ伏した男に対して、向かいの冒険者は言い聞かせるようにつぶやく。

「お前もすぐにわかる。あの夫婦の凄さがな」

冒険者ギルドの小屋が、ラウンジを兼ねた酒場になっているのはどこの町でも同じだが、扉をひとつ開けて事務所に入れば、そこではれっきとしたビジネスが行われている。

事務所の中では、このムーンヴィルの冒険者ギルドの受付および事務を取り仕切る女性、ハナヤカ・テモテが、新たな冒険者の登録手続きを行っていた。

冒険者ギルドの受付と言えば、大抵の場合、女性と相場が決まっている。

それは、荒くれ者の男達を相手に商売するためには、やはり可愛らしく愛想のいい女の方が効率がいいからであり、交渉もスムーズに行くからだ。

この国では男女の間に身分の差は無いが、冒険者などという危険な稼業に手を染めるのは、やはり男が大半だ。物語の中には女の英雄はいくらでもいるが、現実には女が戦いの場に出れば、絶対的な腕力の差がある上に、いざという時には身を守れず、モンスターや悪党たちの慰み者になったり、性奴隷として連れ去られてしまう危険があるからだ。

そんな危険を冒してまで敢えて冒険者になろうという女は決して多くない。もちろん、魔法の力や、アイテムの知識といった特別なスキルを持ち、冒険者として活躍する女性もいるが、全体の割合としては男が八割、女が二割といったところだ。

そんな中で、女でありながら二年足らずで数々のモンスター討伐を成し遂げ、町の英雄として名声を獲得したミュリは、例外中の例外と言える。

入れ替わりこそ常にあるが、現在このギルドに登録されている冒険者は二百人程度。単純計

算すれば、男が百六十名に、女が四十名。

その、四十一人目の女冒険者になるために、ヨリカは今日、この場所へとやってきたのだ。

「ヨリカ・オクヤマさん。もう成人はされてますね。未成年の方を危険な冒険に出すわけにはいけないので、年齢は厳正にチェックさせていただいてます。住民登録はサトの町のものですね。では今回は臨時の仮登録にて承りますので、二週間以内にミッションを行い、本登録に進むかどうかの判断をなさって下さい」

受付嬢ハナヤカは、書類に目を通しながら、よどみない口調ですらすらと説明する。優秀な女性なのだ、とヨリカは思った。当然だ。この北の町、ムーンヴィルは、まだ未開の土地であるこの地方で、国中から冒険者たちの集まるモンスター討伐の最前線の町なのだ。その町の冒険者ギルドを取り仕切る女性が、凡庸であるはずがない。

「もちろん、そのミッションを生き延びれば、の話ですが……」

念を押す様子で付け足されたハナヤカの言葉に、ヨリカは唾を飲み込んだ。
だが心配はない。

今回の冒険には、自分の従姉妹であり、この国でも最強の魔法使いの一人と言われているミユリ・クラウチと、その絶対的なパートナーであり夫でもあるタチバナ・クラウチが、同行してくれるのだ。

「今この場で、ミッションをお選びになりますか？」

ハナヤカは今度はヨリカではなく、隣にいるミユリに声をかけた。

彼女も、たった今冒険者として仮登録をしたヨリカの、保護者でありガイド役が、ミユリであることを知っているのだ。

「そうね。お願いするわ。一番簡単なものをお願い。この子に冒険のイロハを見せてあげたいの」

「わかりました……これなんかどうでしょう。すべての冒険の最初の一步、洞窟内のゴブリン退治です」

「それでいいわ」

ミユリはハナヤカから書類を受け取ると、ミッションの内容に目を通す。

「この洞窟なら、半日もかからずに行ける距離ね。明日の早朝に立てば、日が暮れるまでに戻れるわ。タツちゃん、いいかしら、これにして……?」

ミユリは後ろに立っていたタチバナに声をかけ、夫に書類を見せる。

「うん、いいと思うよ、ミユちゃん。一直線に林の中を通っていけば、三時間もあれば着くんじゃないかな。何も危険なことは無さそうだ」

「わかったわ」

ミユリは夫の言葉に納得すると、くるりと踵を返して受付嬢に向き合い、カウンターに書類を置いた。

「冒険者ミユリ・クラウチ、タチバナ・クラウチ、およびヨリカ・オクヤマ、以上の三名で、

当ミツシオンを遂行します。冒険は危険を伴い、自己責任によるものであることを理解し、負傷する、捕虜となる、財産を失う、命を失う等の被害を被ったとしても、ミツシオンの依頼者および冒険者ギルドに何ら責任を問わないことを誓約し、ミツシオンの達成に全力を尽くします！」

ミユリはそう言うと、右手をすつと伸ばす。カウンターの端に置かれていた羽ペンが宙に浮き、そのままミユリの方へと移動してくる。ミユリは魔法使いらしく、ペンを握ることなく、指先でペンを操って、書類にサインをしてみせた。ペンはそのまま宙を移動し、タチバナの目の前で止まる。タチバナはペンを手に取ると、ミユリのサインのすぐ下に自分も署名する。そしてタチバナからヨリカに、ペンが手渡された。

「これが私の……初めてのミツシオン……」

ヨリカは感慨深げにそうつぶやき、二人のサインの下に、自分の名前を書き記した。英雄として名を馳せているこの二人の名前の下に、自分の名前が並ぶ……

それはずっと冒険者に憧れてきたヨリカにとっては、まさに夢のような瞬間だった。

「じゃあ、よろしくね」

「はい、がんばって下さい！」

誓約と署名が終わり、ミユリとハナヤカは、気軽な調子に戻って挨拶を交わしている。

重々しい誓約は、冒険をする上での大事な形式だが、ハナヤカも、今回のミッションに何の危険も無いことをわかっている。

これから冒険を始めるヨリカの最初の一步とするために、至極簡単なミッションを選び、そこに最強クラスの魔法使いであるミユリとタチバナが同行するのだ。当然ミッションは簡単に達成されるはずである。

もつとも、冒険に「絶対」は無い。

それは、熟練の冒険者であればあるほど、身に染みてよくわかっている事だ。

三人がギルドの事務所から出て来ると、ラウンジ兼酒場に集まっている冒険者たちの視線は、再び彼らに注がれた。

「おい、ミュリさんたち、三人で冒険に行くのか？ あの若い女は誰なんだ？」

「珍しいな。あの夫婦が、他人と一緒に冒険に出るなんて」

「ああ、いつも二人だけで冒険しているのにな」

ヨリカの耳にも、冒険者たちの会話が聞こえてくる。皆の視線が痛い。なんだか自分は嫉妬されているみたいだ。

酒場は冒険者たちのちよつとした驚きで騒然となり、それらの会話は、さきほどビールジョッキでミュリのお尻を指差した、あの駆け出しの冒険者の耳にも聞こえてきた。

「おい、あんた、ちよつと教えてくれないか。先程あんたが言ったみたいに、俺はつい先日、この町にやってきたばかりなんだ。あの二人は、いつも二人きりで冒険に出てるのか？」

腕力だけが自慢のその冒険者は、さきほどミュリのことを教えてくれた、向かいにいるもう

一人の冒険者にそう言って訊ねた。

「あんた、じゃない。俺の名前はティムってんだ。もう一度、丁寧に質問を繰り返せ」

「悪かった。俺の名はジンゴだ。俺が聞いたかったのは、あの夫婦は、いつも二人で冒険に出かけてるのか、ってことだ」

「そうだ。それがあの二人の冒険のスタイルだ」

「たった二人でか？ 冒険っていうのは、もつと連れ立って、何人もの仲間パーティーを組んで出かけるものなんじゃないのか？」

「普通はな。だがあの二人は普通じゃない」

ティムの返答に、ジンゴはまったく納得できていない様子で、さらに聞き返す。

「だ、だが……あの二人は魔法使いだろう。戦うためには、戦士が必要だ。戦士、盗賊、僧侶、

魔法使い、そういった連中が一緒になって、やつと魔物と戦えるんじゃないのか？」

「お前の言いたいことはわかる。お前の言う通り、冒険っていうのは普通は、様々な職業の技能を持った冒険者が、五、六人でパーティーを組んでするものだ。魔法使い二人だけじゃあ、普通は戦えない」

「じゃあ、あの二人はなぜ……？」

「それは彼らの力が普通じゃないからだろう」

ティムは、新参者であるジンゴに、教えてやるよ、という調子で話し出した。

「俺が聞いた話では、あの二人がこの町にやってきたのは二年前。夫婦二人、魔法使い二人組で冒険に出ようとする彼らに、成果を期待した者はいなかったらしい。すぐにモンスターの餌になっちまうだろう、ってな。でも現実は違った。彼らはハイドラ山に巣食うレッドドラゴンを倒し、ガドラル山脈を根城にする巨人族を討伐し、他の誰も成し遂げられなかったような実績を残してきた」

「マジかよ……」

「あのミユリさんという人は、それくらい天才的な魔法使いなんだ。おそらくはこの国でも一、二を争うほどのな。彼女は攻撃に特化した黒魔法の使い手で、その威力の前にはどんなモンスターもひとたまりもないのさ」

「なに、そんなに怖い女なのか……あの色っぽい女が……」

ジンゴは信じられないといった面持ちで振り返り、ミユリの革の胸当てに包まれたふたつの膨らみと、その下に露出したへそを、遠くからしげしげと眺めた。

「だがもちろん、攻撃だけじゃ冒険は達成できない。けれど、パートナーでもあり、夫でもあるタチバナさんは、さつきも言ったが、防御魔法のスペシャリストなのさ。攻撃に特化したミユリさんを、防御と回復に特化したタチバナさんが支えることで、あの二人は完璧なコンビネーションを作り出したんだ。その実力は、あの二人がこれまでに挙げてきた数々の成果が証明している」

ジンゴの視線は今度はタチバナに注がれる。黒い革製の衣装を着て、皆の注目を集めるミユリと対照的に、白いローブをまとい、ミユリの後ろに目立たぬように立っているその男は、なるほど確かにミユリのサポートに徹しているように感じられた。

「そこにはもちろん、夫婦の絆つてやつもあるんだろうな。夫婦としての愛情と信頼関係があるからこそ、可能なスタイルなんだ。ミユリさんを守りたい、という、タチバナさんの愛情が、彼の防御魔法に力を与えているんだろう……」

感慨深そうにそう語るティムの視線の先、ミユリがタチバナに笑顔で声をかけ、仲睦まじそうに談笑している。「タツちゃん」「ミユちゃん」と呼び合う二人の声が、ジンゴの耳にも入ってきた。

その幸せそうな様子に、結婚生活などと言うものに憧れのかけらも無いはずのジンゴさえ、なんだか羨ましいという嫉妬を覚える。

「夫婦か。俺は女なんてものは、やれりやいもんだと思ってたんだが……」

「その気持ちはわからんでもない。ここにいる力自慢の男たちのほとんどは、そう思っているだろう。だがあの二人を見てみると、夫婦の愛つていうのも確かにあるんだと思えてくる。あ、あいう冒険者も、この世界にはいるつてことだな」

タイムの語った言葉は、ジンゴの理解を少しばかり越えている。愛なんて言葉は、生まれてこの方、自分の口から出て来たことはないし、これからも出て来るとは思えない。

「もつとも冒険者として人々の注目を集めても、家に帰れば、普通のおしどり夫婦に戻るらしい。仲良く手をつないで市場で買い物をしている姿もよく目撃されている。俺が聞いた話では、あの二人は同じ町で、子供の頃から一緒に育つた幼馴染らしいからな」

「幼馴染かよ、ちッ……」

ジンゴは、この町にやってきて見かけた一番いい女が、人妻だったというだけでなく、冒険者としても自分よりはるかに上の存在で、幼馴染などという他人の理解を越えた絆で貧相な男と結ばれているという事実には、自分の望みを最後の最後まで断ち切られたような思いだった。

ジンゴはやけになった様子でビールをあおり、それを見た他の冒険者が囁し立てる。

誰かが「ミユリさん、ご武運を祈ります！」と叫び、それに連れて、酒場の中はミユリの名を呼ぶ声で一杯になった。狭いギルドのラウンジに「ミユリ！ ミユリ！」と野太い男達の声が響く。

彼女は町の英雄。冒険者たちの誇りというだけでなく、皆の憧れでもあるのだ。

こうして、騒然とする酒場の中、皆の注目と喝采を浴びながら、荒くれ男たちの間を通り抜け、二人の「保護者」と共に、ヨリカは冒険者ギルドを後にした。

ついに自分は、冒険者としての第一歩を踏み出すのだ。

「冒険者になるのが遅すぎないか、ですって？ そんなことはないわ！」

翌日の早朝、ミツシヨンを遂行するため、家を出るなり質問を発したヨリカに、ミユリはそう答えた。

この国では成人は十六歳と決められている。ヨリカは本当は、成人してすぐに冒険者になりたかった。早く始めれば始めるほど、より大きな成果を出せると思ったからだ。でも現実には、両親を説得したり、国の南方にあるサトの町からこのムーンヴィルまでの旅費を作るために、もう何年かの時間が必要だった。

ミユリは昨日冒険者ギルドへ寄った時と同じ、革製の胸当てと、その上に羽織る短いベスト、そして黒いレザーの長いズボンを着用した姿だ。昨日と違う点と言えば、魔法を繰り出すための杖を持っていることだろうか。黒魔法の使い手らしく、上から下まで黒一色で決めたハードなスタイルである。

その後ろでは、これも昨日と同様に白いローブをまとったタチバナが、冒険に出かける間、家の留守を守るために、建物にシールの魔法をかけている。

ミユリはそんな質問は意味がない、と言わんばかりに両手を振ってみせた。

「この町のギルドにも、十六歳になって、成人してすぐに冒険者になろうとする人たちがたくさん来るけれど、ほとんどは長続きしないわ。私だって、当時はすぐに冒険を始めたかったけど、魔法学部を最後まで卒業したのよ。ファイターやレンジャーだって同じことよ。まずは修行して、戦うためのスキルを身に付けなければ、現場では役に立たないわ」

歩きながら、ミユリは話を続ける。

冒険にはほとんどの場合、徒歩で出かける。それは、この辺りの土地はまだ道路が整備されておらず、また町の外はモンスターがうろついているため、馬車は使えないからだ。遠征の場合には馬に乗ることもあるし、何日もかけて目的地に向かうことになるが、今回のミツシヨンは町からそう離れていない洞窟の中だ。だから、ほとんど日帰りの装備と最小限の食料だけを持って、三人は出かけていた。

「冒険者というのは体力も必要だし、危険も伴うハードな生活だから、半数の人は三十歳になる前に引退してしまう。でも、歳を取っても冒険に出ているベテランの人もいるし、ギルドの登録者の平均年齢は二十八歳のはずよ。そう考えれば、活躍の時間はいくらでもあるわ」

平均年齢二十八歳。

そう考えると、ミユリはその中でもまだかなり若いことになる。

小さい頃に何度か会ったことがあるだけの、少しだけ歳の離れた従姉妹であるミユリの正確な年齢を、ヨリカは覚えていなかった。

だけど、伯母さんの話からすれば、まだ二十歳になるかならないかぐらいのはずだ。

「私だって、二年ちよつとでここまでやれたんだから、ヨリちゃんにだって可能性は十分にあるわ」

そうだろうか。伯母さんの話では、ミユリは子供の頃から優秀で、本来ならば十五歳にならないと入学を許されない王立学園の魔法学部で、特例として十三歳で入学したということだった。そんな才能を持った人と同じように、自分が活躍できるとは、とても思えない。

従姉妹のはずなのに、自分は魔法の才能は少しもなく、その他にも何か人より秀でた部分があるわけでもない。ただ、好奇心と、冒険者になりたい、という憧れがあるだけだ。

何よりも、じつとしていられない、その一心でヨリカはこのムーンヴィルまでやってきたのだ。

けれど、これからそれもはつきりする。

自分が冒険者になれるのか。

憧れていた冒険者に、自分はなる力があるのか。

それを確かめるために、ヨリカは両親を説得して、従姉妹であるミユリを頼り、彼女のサポートの下で、こうしてその最初の一步を踏み出そうとしている。

(恵まれているなあ……)

そう思いながら、ヨリカは自分の両手を交互に見つめる。

そこには、昨日、冒険者ギルドに行った帰りに二人に買ってもらった、銀の短剣と、軽量鉄の盾がある。どちらも、自分の持つてきたお金では買うことの出来ない良品だった。

「残念ながら、僕は魔法使いだから、格闘の技術については教えることが出来ないんだ。でも、剣にも盾にも僕が強化魔法をかけてあげるから、きつと楽に戦えるはずだよ」

歩きながら、剣を眺めていたヨリカに、後ろからタチバナが声をかけた。

ヨリカはまだ、自分がどのクラス（職業）として冒険者になるのか決めていない。

自分には才能がないから、魔法使いにはなれないことはわかっている。

でも、戦士になりたいのかと言われれば、それもわからない。

だからひとまず、体格に合わせて、この短剣と、軽量の盾を買ってもらったのだった。

「でも、冒険って、ずいぶん朝が早いものですね。私、こんなに早起きして行くって思っ
てなくて……」

成人の年齢には達しているとは言え、まだまだ幼いところのあるヨリカは、あくびをひとつ
すると、眠そうに目をこすった。

「ええ、そうね。私たちはいつも、冒険を早めに済ませて、なるべく夕食を家で一緒に取るよ
うにしているの。それにあまり遅くなると、悪い人たちが出歩く時間でしょ？」

「わ、悪い人たち、ですか……？」

ヨリカはなんだかおかしかった。

どんなモンスターもやつつけてしまう英雄が、悪い人たちが出歩く時間を怖がるなんて。

ヨリカはその冗談がおかしくて、クスクスと笑い、それにつられてミユリもクスクスと笑った。

従姉妹として、女友達として、その時初めて、ミユリと気持ちに通じたような気がして、ヨリカは嬉しかった。

けれど、笑い終わると、ミユリはすぐに保護者の表情に戻り、ヨリカに語りかけた。

「ヨリちゃん、冒険が始まる前に、もう一度ちゃんと、伝えておきたいと思ったの。昨日の夕食の時にも言ったけれど、私は半分は、ヨリちゃんに冒険者になってほしくないと思ってるのよ……」

「はい……」

ミユリの言葉に、ヨリカの表情が曇る。でも、この言葉も、ずっと前から予想していたことだ。

「冒険者というものは、憧れだけでなれるものじゃないわ。強力な魔物と戦うためには、特別な力が必要よ。生き残るためには、運も必要になってくる……」

「はい、それは重々、わかってます」

「それに冒険は、やはり危険なものよ。危険な目に合うわよ、きつと。何度も何度も。そんな目に合つて、周りを悲しませ、自分も不幸になって、最悪の場合には命も失う……冒険とはそういうものよ」

ヨリカより背の高いミユリは、上から覗き込むようにして、ヨリカの目を見つめ、警告するようにそう語りかける。その真剣な様子に、ヨリカも本気で答えなくてはいけないと思い、真剣な眼差しで、まっすぐにミユリの目を見返した。

「それでも私、やってみたいんです。サトの町で、私、自分の居場所がどこにも無いように感じていました。冒険の中に、その居場所が見つかるんじゃないかって、ずっとそう思ってたんです！」

ヨリカは訴えかけるように、ミユリの顔を見上げ、そう叫んだ。

その瞳には、一步も譲らないという決意の色が表れていた。

「わかったわ。とにかく、まずはこのミッションを無事に成し遂げましょう。その後のことは、その時に考えればいいわ……」

ミユリは一瞬、何かをあきらめたような、悲しげな表情をしたが、すぐに元の調子に戻り、三人は朗らかに談笑しながら、朝の平野を横切り、ゴブリンの洞窟のある森の中へと入っていった。

(体験版ここまで)

© 八ヶ岳昌司 2020年

ブログ 寝取られと純愛（現在休止中）

nrlove.com

表紙絵 三日月アルペジオ

<http://roughsketch.en-grey.com/>